

Title	初期イスラーム時代のキリスト教徒アラブ社会：タグリ ブ族の事例を中心として
Author(s)	太田, 敬子
Citation	東洋史研究 (1996), 55(1): 144-181
Issue Date	1996-06-30
URL	http://dx.doi.org/10.14989/154997
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

初期イスラーム時代のキリスト教徒アラブ社會

——タグリブ族の事例を中心として——

太 田 敬 子

はじめに

I タグリブ族の歴史と勢力範囲

(1) タグリブ族の歴史

(2) タグリブ族の勢力變化と移動

II ムスリム支配下のタグリブ族の状況

(1) タグリブ族への課税

(2) タグリブ族のキリスト教會

まとめとして

はじめに

①主題と目的

本稿の目的はイスラーム支配下におけるキリスト教徒アラブの状況とその動向を跡づける事である。イスラームの教義におけるアラブ即ちムスリムという原則に影響されて、イスラーム史上におけるキリスト教徒アラブの存在については見過ごされがちであるが、地域差こそあれ彼らの勢力はかなり後まで残存し、社會的にも政治的にも大きな影響力を有して

いた。特に初期イスラームの數世紀間においては、彼らへの對處はムスリム政權にとって大きな課題であったと考えられる。そこで本稿で取り上げるのは、ジャジールの有力部族として知られているタグリブ族である。タグリブ族はラビーア諸族内の代表としてその人口の多さや分布地域及び勢力の大ききで知られているだけでなく、イスラーム領域内に留まったキリスト教徒部族の中心的存在として政府との獨自の關係、さらにイスラーム法上の特殊な地位を有していた。本稿では前イスラーム時代からの動向を踏まえて、大征服期からアッバース朝時代までの彼らの歴史を再現し、その勢力と活動範圍の變遷を辿ると共に、ムスリムの支配下において彼らの置かれていた狀況及びムスリム社會との關係について検討を進めたい。

② タグリブ族の起源と居住地

タグリブ族は Taghlib b. Wā'il b. Qāsi b. Hinh b. Afsā b. Du'mī b. Jadila b. Asad b. Rab'ā b. Mu'add b. 'Adnān 族であり、兄弟關係にあるバクル族と共にラビーア系の最重要部族とされている。⁽¹⁾ 初期イスラーム時代には既に同部族は「ジャジールのアラブ部族」として知られていた。しかしジャジールに限らずアラビア半島東北部からティハーマ附近、ヤマーマからバフライン地方、メッカ近郊からヤマン方面、半島南部のフルサーン島にも彼らは居住領域を有していた事が記録に残されている。⁽²⁾ アラビア半島における同族の本據地はヤマーマとバフラインであった。彼らが本據地をイラク方面に移したのは、五世紀末から六世紀前半にかけてと考えられ、キンダ族の興隆やバクル族との抗争を通じて北上し、ヒーラ近郊からユーフラテス流域へと移動し、最終的にジャジールを本據地と爲したと言われ、彼らの進出がディヤール・ラビーアの名の起源となったともいえる。

③ ジャジールのキリスト教徒アラブ⁽³⁾

前イスラーム時代におけるジャジール地方は東方キリスト教諸派の一大中心地であった。キリスト教諸派の進出はネストリウス派に始まり、單性論派がそれに續き、北部を中心に次第に後者が有力となっていた。六世紀半の Aphūhemneh

(タクリートの主教)時代に同地方のアラブに単性論が廣がつた頃から、ネストリウス派は南方に本據を移していったといわれる。この地方のキリスト教徒アラブはヒーラのラフム朝とは異なり、大方が単性論派を信奉する者であったといわれている。⁽⁴⁾

三／九世紀のムスリムの地理書及び歴史書等において、アラブの分布領域の中でジャジーラは特殊な位置づけをなされている。この地方はラビーア族とムダル族の遊牧民の居住・放牧領域ではあったが「アラブ領域」とは見なされていない。東ローマとベルシアが支配し、アラブも含めて住民は兩國の庇護の下に暮らし、キリスト教化していたからである。⁽⁵⁾ ジャジーラのアラブ遊牧民としてはタグリブ・ナミル・イヤード・‘Aqūlāyē・タヌーフ族等が史料に登場する。その中で次第にタグリブ族は優位を獲得し、七世紀までにはジャジーラのアラブを代表する存在になっていたと考えられる。⁽⁶⁾

イスラーム時代になると、ムスリム軍の攻撃や改宗及び移住等によってキリスト教徒アラブの人口は減少し、新來のムスリムアラブ部族が次第に有力になっていく。シリアにおけるように大規模な移住も見られ、特にイヤード族の大方は東ローマ領域へ移住した事が知られている。⁽⁷⁾ イスラーム以降の數世紀間にジャジーラのアラブ社會は大きな變化を遂げたが、その中でタグリブ族は固有の勢力をかなりの期間保持していたと考えられる。⁽⁸⁾

④史料と参考文献

イスラーム時代のキリスト教徒アラブの研究は殆ど無いといってよい。ムスリム支配下のジャジーラキリスト教徒全體に關しても非常に限られている現状にある。⁽⁹⁾ 従って以下では本稿に利用した主な史料を提示するに留まる。

* Abū Yūsuf (d. 182/798), *Kitāb al-Kharāj*, Cairo, H. 1352. 以下 Yūsuf へ略。

* Yaḥyā b. Ādam (d. 203/818—9), *Kitāb al-Kharāj*, ?, H. 1377. 以下 Yahyā へ略。

* Qudāma b. Ja'far (d. 320/932—3), *Kitāb al-Kharāj wa Ṣinā'a al-Kitāb*, Frankfurt, 1986. 以下 Qudāma へ略。

* Khalfā b. Khayyāt (d. 240/854), *Ta'rikh Khalifa b. Khayyāt*, 2 vols., Damascus, 1967-8. 以下 KH へ略。

- * Ibn Qutayba (d. 276), *al-Ma'ārif*, Cairo, 1981. 𐤆𐤊𐤁 IQ 𐤆𐤊𐤁°
- * al-Balādhurī (d. 278/892), *Futūḥ al-Buldān*, ed. de Goeje, Lugduni Batavorum, 1866, rep. Frankfurt am Main, 1992. 𐤆𐤊𐤁 F 𐤆𐤊𐤁°
- * idem, *Ansāb al-Ashraf*, vol. 1, 3, 4, 5, 6, Jerusalem, 1936. 𐤆𐤊𐤁 B 𐤆𐤊𐤁°
- * al-Ya'qūbī (d. 283/897), *Ta'rikh al-Ya'qūbī*, 2vols., Leiden, 1969. 𐤆𐤊𐤁 YA 𐤆𐤊𐤁°
- * al-Ṭabarī (d. 310/923), *Ta'rikh al-Rusul wa al-Mulūk*, ed. de Goeje, 15vols., Lugduni Batavorum, 1879—1901. 𐤆𐤊𐤁 T 𐤆𐤊𐤁°
- * al-Azḥī (d. 334/945), *Ta'rikh al-Mawṣil*, Cairo, 1967. 𐤆𐤊𐤁 AZ 𐤆𐤊𐤁°
- * al-Mas'ūdī (d. 346/958), *al-Tanbih al-Ashraf*, BGA VIII, Leiden, 1968. 𐤆𐤊𐤁 MS 𐤆𐤊𐤁°
- * al-Iṣfahānī (d. 356/967), *Kitāb al-Aghānī*, 31vols., Cairo, 1969. 𐤆𐤊𐤁 I 𐤆𐤊𐤁°
- * Ibn al-Athīr (d. 630/1233), *Kāmil fī Ta'rikh*, 13vols., Beirut, 1973. 𐤆𐤊𐤁 K 𐤆𐤊𐤁°
- * Ibn Khaldūn (d. 808/1406), *Ta'rikh Ibn Khaldūn*, vols. 2—3, Beirut, 1971. 𐤆𐤊𐤁 IK 𐤆𐤊𐤁°
- * al-Hamadānī (d. 334/945), *Ṣifat al-Jazīra al-'Arab*, Amsterdam, 1968. 𐤆𐤊𐤁 H 𐤆𐤊𐤁°
- * Ibn Ḥawqal (d. ca. 367/977), *Ṣūra al-Ard*, BGA II, Leiden, 1967. 𐤆𐤊𐤁 IH 𐤆𐤊𐤁°
- * al-Andalsī (d. 487/1094), *Mu'jam mā Ista'jama*, 2vols., Beirut, 𐤆𐤊𐤁 AN 𐤆𐤊𐤁°
- * Yaqūt al-Ḥamawī (d. 626/1228), *Mu'jam al-Buldān*, 5vols., Beirut, ?. 𐤆𐤊𐤁 Y 𐤆𐤊𐤁°
- * Ibn 'Abd al-Ḥaq (d. 739/1138—9), *Marrāsid al-Iḥiā' 'alā al-Amkina wa al-Buḡā'*, 3vols., Cairo, 1953. 𐤆𐤊𐤁 AH 𐤆𐤊𐤁°
- * *Incerti auctoris Chronicon Pseudo-Dionysianum vulgodictum I-II*, ed. I. B. Chabot, I-II, tr. (I) I. B. Chabot,

(II) R. Hespel, CSCO SS SER. 3: t. 43, 53, 66, 213, Louvani, 1927, 1949, 1965, 1989. ㄱㄴ PS と略。

* Michael the Syrian (d. 1199), *Chronique*, ed. & tr. I. B. Chabot, 4vols., Paris, 1963. ㄱㄴ M ㄴ略。

* Bar Hebraeus (d. 1286), *The Chronography*, ed. & tr. E. A. W. Budge, 2vols., Amsterdam, 1976. ㄱㄴ BH ㄴ略。

I タグリブ族の歴史と勢力範囲

(1) タグリブ族の歴史

①前イスラーム時代

史料上で彼らが初めて登場するのはササン朝のシャープール2世時代(309—379)である。彼はヤマーマとバフライン地方にいたタグリブ・バクル・タミーム族等を攻撃し、その一部をアフワーズからファールス・キルマーン方面に移動させたという⁽¹⁰⁾。しかしこの移住政策の後もタグリブ族がヤマーマに勢力を保持していたのは確かである。そしてキンダ王フジュルの時代(ca. 450—480)後に、バクル族(シャイバーン族)とタグリブ族の有名な争いが始まる。血縁部族間の主導権争いといわれる両者の戦いは、結局ヤマーマ地方の支配権を巡る抗争であったと考えられる⁽¹¹⁾。戦闘はタグリブ族の Kulayb とシャイバーン族の Jassās の対立に始まり、約四〇年間続いたという。結局五二五年頃ヒーラ王ムンジル3世(ca. 505—44)の下で和平が結ばれて終結した⁽¹³⁾。これら戦闘を通してタグリブ族はヤマーマにおける主導権をシャイバーン族に取って變わられたと考えられる。

五世紀末頃、ラビーア族がラフム朝のムンジル2世をヒーラから追放し、キンダ王ハリス(五世紀末から五二八年)の下に向かって彼をバクル族の王とし、彼と一緒にイラクに居住していたアラブ全てに勝利したという事が記録されている⁽¹⁴⁾。それ以降タグリブ族もバクル族もハリスの傘下に属しているので、この際のラビーア族中には両部族とも含まれて

いた事は明らかである。この記録は彼らがラフム朝からキンダ王に盟主を変えた事を示すと共に、總體としてのラビーア族の影響力の強さを物語っている。「バクル族の王」というのは、おそらくバクル族がハーリスの下に留まり、タグリブ族は新たにハーリスが征服したイラク方面に向かったのではないかと考えられる。また五〇二—三年にはハーブル川岸のタグリブ族がヒーラに來襲したと考えられるので、既にこの頃彼らはジャジーラに進出していたと言つてよい。⁽¹⁵⁾當時まだバクル族とのスルフは締結されていないが、一應兩者の勢力區分が出來たと見なされる。

ムンジル3世の仲介による兩部族の講和締結以降、タグリブ族の活動の中心はサワード中心となるように思われる。キンダ王ハーリスは晩年アラブ部族の支配權を息子達に分割し、タグリブ族は Salama b. al-Harith の傘下に屬する事になった。⁽¹⁶⁾ハーリス没後のサラマと Shurahbil の兄弟争いである Kulab の戦いでは、ナミル族やタミーム族の Sa'd b. Manat 族と共にサラマ方で戦い、シュラフビールとバクル族に對して勝利をおさめた。しかしその後タグリブ族はサラマを追放しラフム朝に接近する。

ラフム朝のムンジル3世はキンダ王ハーリスの後見でヒーラ王となり、ハーリスの娘 Hind と結婚していたが、講和締結後にタグリブ族と共にキンダ族を攻撃し、勝利をおさめた。そしてタグリブ族の支配權を息子 'Amr b. Hind に委ねた。⁽¹⁷⁾彼はまたササン朝のガッサン朝攻撃に連動し、タグリブ・イヤード・バフラー族を率いて al-Thawiyā でハーリス2世を打破した。⁽¹⁸⁾これは丁度タグリブ族の詩人として有名な 'Amr b. Kulthūm の時代に相當する。五六九年 'Amr b. Hind (555—69) の招きでジャジーラからヒーラへ自族を率いて來訪したのは彼である。この時のユーフラテス川岸の事件によりタグリブ族はラフム朝に反旗を翻してジャジーラに歸った。さらにシリアへ向かい、再びガッサン朝とも戦鬪を交え勝利を収めた。⁽¹⁹⁾この頃またバクル族との抗争も再開したようである。一方、アサド族に對する 'Imru al-Qays の復讐戦に味方した事が知られている。⁽²⁰⁾六世紀後半にかけてタグリブ族の活動範圍は廣がり、特にサワードからユーフラテス流域にかけてのタグリブ族の影響力はさらに増大したと思われる。おそらくジャジーラでの勢力確立もこの時期にな

されたと考えられる。⁽²¹⁾ またアラビア半島でも戦闘を行っている。⁽²²⁾ 以上のように同部族の行動範囲は格段と廣くなり、ジャジーラを本據地として勢力を擴大していった事が確認される。

しかしイスラーム前夜になるとタグリブ族の状況に變化がみられる。二／六二四年頃タグリブ族はイヤード・タイイ・Qays b. Mas'ūd 族と共にホスロー 2 世 (590—628) の派遣した軍に加わって Dhu Qar でシャイバーン族と戦い、後者に多大な打撃を與えた。しかしイスラーム直前の事といわれるユーフラテス川の戦いにおいては、シャイバーン族の al-Muthanna b. Haritha⁽²³⁾ の攻撃を受け、溺死者を含めて多くの死者を出した。さらにサワードの Bariq の戦いにおいて、タグリブ族はナミル族とタミーム族と戦い、その後スルフの仲介をバクル族 (シャイバーン族) に依頼したが、却って同部族の攻撃を受け、タミーム族と共に多大な損害を受けた。かつてタグリブ族がこれ程の酷い被害を被った事はなく、シャイバーン族の手にした戦利品と捕虜は彼らの行った戦争の内での最大の量であったという。大征服の前夜においてタグリブ族は舊來の宿敵であったシャイバーン族に破れ、それが後者のサワード進出の道を開く結果となったようだ。⁽²⁴⁾

② 初期イスラーム時代

イスラーム以後のタグリブ族に關しては、リッダの混亂期にジャジーラからヤマーマへ來襲した事で有名である。⁽²⁵⁾ 一／六三二年、彼らはタミーム族の Sajāh bint al-Harith の運動に母方部族として参加し、al-Hudhayl b. Imrān al-Taghlibi に率いられてジャジーラから來襲した。他に 'Aqqa b. Hīlāl の率いるナミル族 'Waththāb b. Fulān の率いるイヤード族 al-Sahl b. Qays の率いるシャイバーン族が参加した。つまりイラクからジャジーラにかけて本據を持つアラブ部族が殆ど参加したのである。彼女はジャジーラのタグリブ族の下で預言者を稱し、同部族と父方の部族を率いて戦い、ヤマーマにおけるムサイリマとの和平の後にジャジーラに歸った。以上の事からも彼女の運動を支えたのはジャジーラのアラブ勢力、特にタグリブ族であったと言える。フザイルはキリスト教徒で、タグリブ族の影響でサジャーフ自身もキリスト教に通じていたという。Khalid b. al-Walid によって鎮壓された後も彼女がタグリブ族の下にいた事が記

録されている。⁽²⁶⁾

ムスリムのサワード征服に際して、一二／六三三年タグリブ族はナミル・イヤード族と共に 'Ayn al-Tamr とベルシ
ア防衛軍に参加し、ハーリド軍に打破された。⁽²⁷⁾ その後前述のフザイルがハーリドのシリア轉進軍に遭遇して破れ、al-Mu-
sayyah で再び軍を集めたが打破された。⁽²⁸⁾ またタグリブ族の Rabi'a b. Bujayr はルサーファ東方の al-Thaniy にいたが
同じくハーリド軍に打破された。一方、フザイルはその近くの al-Bishr へ逃れたが、これもハーリドの軍に打破された。⁽²⁹⁾
同年 Dhu al-Qa'da 月、ハーリドは al-Fird で東ローマの防衛隊と戦闘を交えた。この時もタグリブ族とイヤード族は
ベルシア人部隊と共に東ローマ側で参戦し、敗北を喫している。⁽³⁰⁾ 以上のようなサワードからシリアへ向かうハーリド軍と
の諸戦闘でタグリブ族の多数が殺害され捕虜となったという。

一方二三／六三四年、al-Buwayb におけるベルシア軍との戦闘では、タグリブ族とナミル族のキリスト教徒商人がム
サンナーの軍(シャイバーン族中心)を支援した事が伝えられている。⁽³¹⁾ しかしその後ムサンナーはシャイバーン軍を分け、
al-Ka'ath のタグリブ族居住地に軍を派遣して住民を逃走させた。さらにシッフィーンのタグリブ族とナミル族の住民を
攻撃させ、⁽³²⁾ 住民はジャジールに逃走した。ムサンナー自身もタグリブ族の居住地を襲撃、逃亡した民衆を追撃させてタク
リート下流でも打破した。⁽³³⁾ この段階まではタグリブ族はムスリム軍の攻撃対象であり、總じて反ムスリム側に立ってい
る。特にムサンナーの率いるシャイバーン族との戦いには前イスラーム時代からの確執が尾を引いていたと考えられる。

タグリブ族のムスリム側への歩み寄りとは、一六／六三七年のタクリート攻撃から始まった。⁽³⁴⁾ 當初同部族の部隊は東ロー
マ指令官の下に参集し、ローマ人、モースル住民、ナミル・イヤード族等と共にムスリム軍に對して籠城していた。しか
し Sa'd b. Abi Waqqas の將軍 'Abd Allah b. al-Mu'tamm の呼びかけに應じて他のアラブ部隊と共にムスリム軍に
内通し、タクリートを陥落へと導いている。この時彼らはイスラームを受容したという。⁽³⁵⁾ 彼らはムスリム軍に参加し、翌
一七／六三八年 Ibn al-Mu'tamm がウマルにフムスを送った際、彼らの指導者達はメディナへ隨行した。タバリーによ

るとこの際にタグリブ族に關する契約が締結されたという。その後タグリブ族と彼らに従つていたというナミル・イヤード族はマダーインに移住、さらにクーファに街區を割り當てられて居住した。⁽³⁶⁾

一九／六四〇年もしくは一七／六三八年のジャジィラ征服に際して、タグリブ族と同地方の他のアラブ部族に對して al-Walid b. 'Uqba がクーファから派遣され、彼らはムスリムとキリスト教徒に係わらずワリードに味方する事を表明した。ワリードはその後ジャジィラのアラブ部族の支配を任された。しかし彼らの一部、特にイヤード族の大方は東ローマ領域へ移住してしまつたという。ワリードはウマルにこの事を通報し、キリスト教徒アラブの移住に關してウマルと東ローマ皇帝間で交渉が爲されている。シリアからのガッサン族等の移住やイヤード族の問題が、タグリブ族對策に大きな影響を與えたと考えられる。この時のタグリブ族の歸順問題は本稿 II 章で詳解するが、結局タグリブ族に關する特別規約が認められて一應決着が着いた。しかしその後もタグリブ族の扱いにワリードは非常に苦勞し、追いつめられた彼が暴舉に出ないように、ウマルは彼を解任して Furat b. Hayyan と Hind b. 'Amr al-Jamali の兩名をジャジィラのアラブに任命したといふ。⁽³⁷⁾ タグリブ族は一應歸順を表明したが、ムスリム政府の扱いを見ても彼らがジャジィラのアラブの中で特別な勢力を有し、注目されていたと考えられる。

③ウマイヤ朝時代

ウマイヤ朝成立にいたる第一次内亂に、タグリブ族は餘り深い係わりを持っていない。⁽³⁸⁾ しかし彼らは第二次内亂では大きな影響を受けた。この時期のジャジィラを巡るアラブ部族抗争は、ズバイル派とマルワーン派の抗争というよりは、アラブ部族の勢力圏爭奪戦と特徴づけられる。⁽³⁹⁾ マルジュ・ラーヒトで敗北した後、六五／六八五年の 'Abd al-Malik の即位に際して、キラブ族(カイス系)の Zufar b. al-Harith はバィアを拒否し、ジャジィラへ移動してカルキシーヤを占據した。彼らはズバイル派に立つてマルワーン派のカルブ族と戦いを續けたが、スライム族(カイス系)の 'Umayr b. al-Huṭab も彼に續いてジャジィラへ入った。この時タグリブ族はマルワーン派ではあつたが、カルブ族に對抗して

彼らに味方して戦ったという。當時タグリブ族はクーファにいた少數の者以外殆どがジャジーラに居住していたという。他の居住地としてはアゼルバイジャンが知られていた。そしてジャジーラには彼らの他にカイス・クダーア・ムダル族がいたという。⁽⁴⁰⁾

カイス族とタグリブ族の対立は、新來のカイス族が近隣のタグリブ族を侵害し、キリスト教徒を嘲笑したために始まったという。戦闘はカルブ族襲撃からの歸還途上にあつたウマイルのカイス軍が、タグリブ族居住地を攻撃したハーブール川岸の戦いに始まる。當時タグリブ族の領域はハーブール川とユーフラテス川とチグルス川の間にあつたという。カイス族の攻撃に對してタグリブ族はカルキーシーヤのズファルに訴え、カイス族の退去と彼らの放牧領域の返還を求めた。しかしズファルは賠償には應じたがカイス族の退去は拒否したという。そこでタグリブ族はカルキーシーヤ近郊のカイス族の居住地を襲撃した。ズファルは兩部族の關係を一旦は修復したというが、ウマイルは *Mus'ab b. Zubayr* ⁽⁴¹⁾ の下へ向かい、タグリブ族のワリーとなる承認を取り付けた。ムスアブはズファルが承認する事を條件に承認したという。ズファルはタグリブ族にその事を仲介したが、彼らはそれを認めず戦闘になつたようである。⁽⁴²⁾

カイス族との諸戦闘はハーブール流域のタグリブ族の居住領域を中心に行われ、I章(2)の表参照、七〇／六八八—九九年の *al-Haashnak* の戦いでウマイルは殺害された。タグリブ族はアブド・アルマリクに彼の首を送つたという。カイス族はウマイルの復讐をズファルに依頼、一度は拒絶されたが結局ズファルを戦闘に引き込んだ。七一／六九〇—一年もしくは翌年、ズファルの率いるカイス軍とタグリブ族の戦いがモースル近郊の *al-Kuhayl* で行われ、タグリブ族は甚大な被害を受けたと記録されている。⁽⁴³⁾ さらに抗争は七三／六九二年にイブン・ズバイルが殺害された後も續いた。第二次内亂の終結によつてカイス族とタグリブ族も一時抗争を停止したが、スルフは締結されず、却つてスライム族の *al-Jahhaf b. Hukaym* によるタグリブ族とバクル族のサダカ契約文書捏造事件が起きた。彼はカリフから兩部族のサダカ徴收を任されたように文書を偽造し、ルサーファでカイス軍を集め、*al-Bishr* 近郊 *al-Rutab* の濕原でタグリブ族を攻撃し打

破した。これが有名なビシュルの戦いである。その後ジャッハーフはアブド・アルマリクの追求を受けて東ローマ領域へ逃げたが、後者から安全保障を取り付けて歸還した。彼の賠償金は一族であったハッジャージュが支拂ったという。⁽⁴⁴⁾

以上のように、タグリブ族はジャジーラに進出してきたカイス族等のムスリム諸族との對立によって、彼らの本據地自體で壓迫を受け、一連の戦鬪を通じて大きな打撃を受けた。その結果ジャジーラにおける彼らの勢力は大幅な後退を餘儀なくされたと考えられる。これに續くワリード一世時代にタグリブ族に對する宗教的壓迫の記録が見え始めるのもその反映と見なされる。⁽⁴⁵⁾ さらに彼らの勢力後退はジャジーラのキリスト教徒社會全體にも影響したといえる。以後ムスリム政府の統制強化が着々と行われていく事もそれを示している。⁽⁴⁶⁾

④ アッバース朝以降

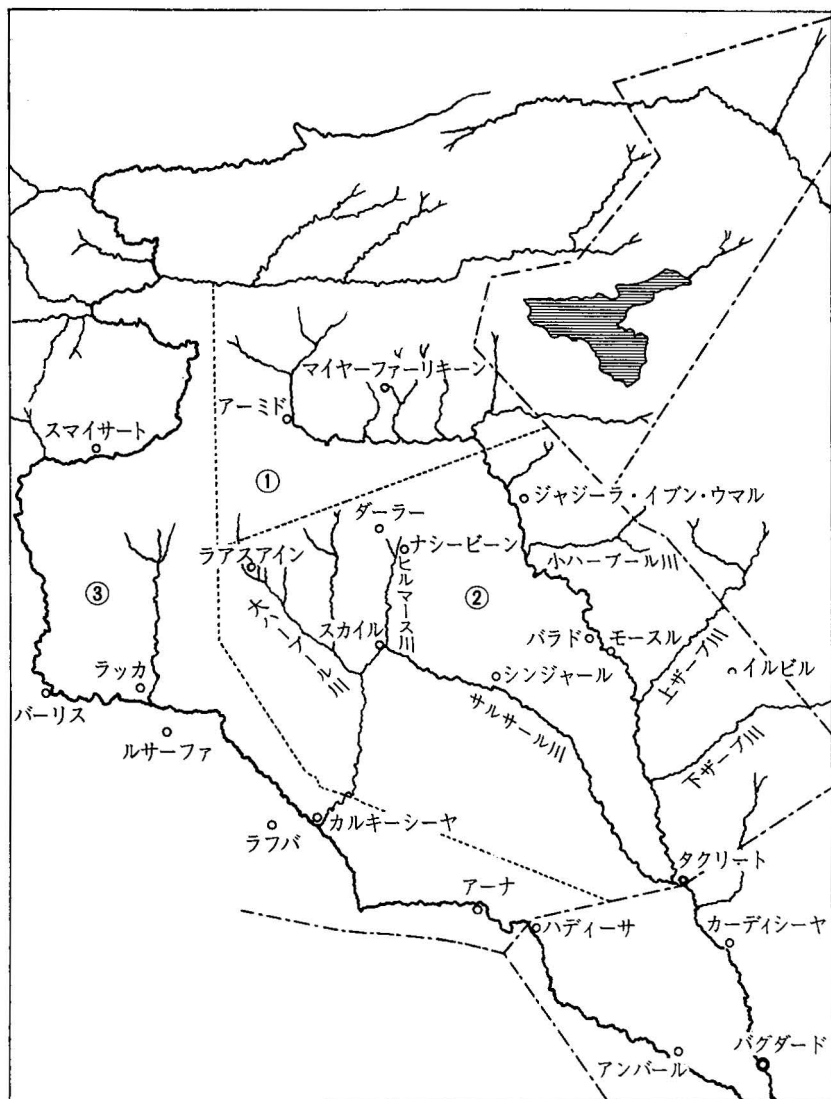
アッバース朝時代になるとタグリブ族に關する記録の性格に變化が見られる。全體として史料に登場する事が散發的になり、アラブ間抗争のような部族全體に係わる動きは少なくなる。また行動範圍もモースル近郊に限られてくる。内容的にもモースルの支配権争いやハワリージュ派の運動との係わりが中心となっていく。⁽⁴⁷⁾

ウマイヤ朝時代からジャジーラはハワリージュ派の勢力が強い事で知られていたが、タグリブ族がそれに係わっている事例は殆ど無い。⁽⁴⁸⁾ アッバース朝時代になると彼らがハワリージュ派に係わる記録は多くなるが、その姿勢には一貫性が見られない。一七八／七九四年、タグリブ族出身と言われるハワリージュ派 al-Walid b. Tarif がジャジーラ北部で活動を展開した。⁽⁴⁹⁾ しかしこの時タグリブ族を率いた Buzār ʾIbrāhīm b. Khāzīm がナシービーンで彼を迎え打っている。

その後ワリードは同市を占領したが、タグリブ族の Jaʿfar b. ʿAbd Allāh b. Hashīm (Hishām) が町を買い戻したという。ワリードはシャイバーン族の Yazīd b. Maziyad によって殺害された。一方、ブザールはシャイバーン族のハワリージュ派 Ṣāḥṣāh と戦っている。しかし二〇二／八一六七年にはハワリージュ派の Mahdī b. ʿAlwān の軍にタグリブ族が参加し、al-Baṭī の戦いでカイス族の軍に敗北したという記録もある。⁽⁵⁰⁾

一方、この頃からモースル總督や有力者としてタグリブ族出身者、特に 'Umar b. al-Khatīb 家の者が多くみられるようになる。⁽⁵¹⁾ 一九七／八一—二年、アミーンによるモースル總督 al-Hasan b. 'Umar b. al-Khatīb が到來したが住民に拒否された。また一九九／八一—五年、ナシービーンのワリーであった同家の Aḥmad は、タグリブ族の軍團を率いてモースルに到來している。二五四／八六八年に始まる Musāwir b. 'Abd Allāh al-Bajālī のハワリージュ派反亂に際しては、Ayyūb b. Aḥmad b. 'Umar b. al-Khatīb がモースル總督に任命され、息子の al-Hasan を討伐に派遣した。彼の軍にはタグリブ族が含まれていたと考えられる。⁽⁵²⁾ さらに二六〇／八七三—四年にモースル住民の反亂が起こり、當時の總督の代官が追放され、タグリブ族出身の al-Haytham b. 'Abd Allāh b. al-Mu'ammir がモースル支配に任命された。しかし彼は住民軍に撃退され、後任にウマル家の Ishāq b. Ayyūb が任命された。彼はタグリブ族の二萬名を率いて同市に向かったが、支配權を得る事は出来なかったという。⁽⁵³⁾ この様にモースル地方の支配權を得ようとする同部族の有力者に協力して、同地方のタグリブ族が行動する事例がしばしば見られる。しかしその際、自治を求めるモースル住民とは對立する傾向にあった。

タグリブ族の場合によつてはハワリージュ派の一部の支援に回っている。ムサーウィルの後繼者を巡る Muḥammad b. Kharzād と Hārūn al-Kharījī の抗争に際して、タグリブ族の一部は後者を支援⁽⁵⁴⁾、また二八〇／八九三年のハールーンと Muḥammad b. 'Uḥada の争いにも彼を支援している。さらに二八二／八九五年のハワリージュ派討伐に際し、ハールーンはタグリブ族の下へ逃れている。⁽⁵⁵⁾ タグリブ族の一部は個人的にハールーンを支援していたようである。しかし全體的には、この時代のタグリブ族は自族の有力者を通して體制側に付く傾向にあり、ジャジーラの地方分權化傾向の流れにおいても獨立を目指すとした形跡は見られない。モースル住民の自立運動やハワリージュ派の反亂に對しても積極的支援は爲さなかったと言える。⁽⁵⁶⁾ 同部族はモースル地方を中心としてジャジーラ一圓にまだ影響力を有していたといえるが、彼らの行動には部族としてのまとまりや獨立した行動は感じられなくなる。



タグリブ族関係の地名（ジャジーラ）

- ① ディヤール・バクル
- ② ディヤール・ラビーア
- ③ ディヤール・ムダル

以上アッバース朝時代までのカリフ政權下におけるタグリブ族の歴史を辿ってきた。その後のアッバース朝の混亂期において、タグリブ族はモースルのハムダーン朝の祖となった事で知られている。しかしハムダーン朝の出自自體ははっきりしていない。少なくとも彼らの始祖とされる ⁽⁵⁷⁾Handān b. Handūn はモースルのタグリブ族系の總督の軍に参加しているの、何らかの關係はあった事は確かである。おそらくモースル地方に依然として存在していたタグリブ族の影響力を利用するために、その系譜を利用したと考えられる。

(2) タグリブ族の勢力變化と移動

① タグリブ族の居住區と行動地域に關する記録

タグリブ族の勢力變化と移動に關しては、その歴史を辿る事で大筋は理解できるが、彼らの動向をさらに明確にするために以下では同部族の歴史に登場する地名及び地方名を表にしてみた。

タグリブ族關係の地名

五世紀後半の戰場	ヘヤマーマに居住地	
Ḥaḥr	al-Bardān 山麓 (メッカ近郊ナフラ川沿い) 近郊、al-Saḥsahan の水場	K, 1/507
— バクル族との戦いの地 —		
al-Nihy	ナシナドの地	Y, 5/329, AN, 2/780, 1337, K, 1/523-6
ʿUnayza	?	AN, 2/1362, Q, 1/393, I, 4/143-4, IQ, 605-6
Wāridāt	メッカ街道の左の地	AN, 2/1362, Q, 1/393, I, 4/143-4, IQ, 605-6, Y, 5/347
al-Dhanāḥib	ヤメンの Zubayd の手前の地ナシナドの川 Falj の右	Y, 3/7-8, AN, 2/1362, H, 133

Himn
Qusaybat
Qida (Fasl)

?

ヤマーマから三日行程の山道

AH, 1/405, AN, 2/1362, I, 4/143-4, Q, 1/391
AN, 2/1362
AN, 1/85, 2/1079-80, I, 4/143-4, IQ, 605-6,
Q, 1/391

六世紀の戦場へジャジーラに居住地へ

al-Thawiya

クローファ近郊

シリフ近郊

Kulab

バスラとクローファの間の水場、ヤマーマから七日行程

ノラビマ半島

Y, 2/87-88, K, 1/435
I, 9/181-3
AN, 2/1132, K, 1/550, IQ, 1/391-2, Y, 4/472-3
K, 1/504-5, 1/516-7

七世紀初頭の戦場へジャジーラに居住地へ

Dha Qar

クローファとワシントの間

ネーフラテス川岸

Barig

カーディシーヤとバスラの間

Y, 4/293-5, MS, 241, EI2
K, 1/647
Y, 1/319-20, K, 1/648

初期イスラーム時代へジャジーラに居住地へ

— ハーリット軍との戦場 —

'Ayn al-Tamr

ヒーラ西方

al-Thamiy

ビシュル近郊のジャジーラの地、ルサーファ東方(居住地)

al-Rudab

ルサーファの地(居住地)

al-Firad

ユーフラテス川岸、シリヤとジャジーラの境界

al-Musayyah

Hawran と al-Qalit の間シリヤ東方の境界

al-Hasid(al-Husayd) ジャジーラ方面のイラクの境界

— ムサンナーとの戦場 —

T, 1/2062, K, 2/394-5, Y, 2/150
T, 1/2072-3, K, 2/398-9, Y, 2/86
T, 1/2072-3, Y, 3/50
T, 1/2073-4, K, 2/399, Y, 4/243-4
K, 2/407, Y, 5/144
K, 2/407, Y, 2/266-7

- al-Buwayb クーファ近郊の川、ユーフラテス支流
 al-Kabāth ユーフラテス川のイラク側（居住地）
 タクリート下流
 Šiffin ユーフラテス川中流の地（居住地）
 Fayyūm Hit 近郊ユーフラテス川岸（居住地）
 ムスリム軍への参加—
 タクリート ジャジラ境界のチグリス川岸の町
 al-Hisnāyn(al-Hisnān) ? シッフィーンでフリー軍に参加
 シッフィーンでフリー軍に参加
- ウマイヤ朝時代へジャジラ・アゼルバイジャンに居住地〉
 —カルブ・カイス族との戦場—
 カイス族の村
 Tadmur シリア砂漠のオアシス
 al-Balikh 川 ラッカ南一マイルでユーフラテス川に注ぐ
 Makisin ラスアインから一日行程のハーブル川岸
 al-Tharthar タクリート近郊の川、シンジャールとタクリートの間
 al-Hashhak 川近く
 al-Fudayn ハーブル川岸、マキシーンとカルキシーヤの間
 al-Sukayr ハーブル川岸の小町
 al-Ma'arik モースルとそのアキークの間
 Libā ータクリートとモースルの間のチグリス川岸、Balad と
 al-'Aqr の間
 Balad モースルとナシービーンの間
 al-Shar'abiya ジャジラの地
- T, 2/2190-1, K, 2/443, Y, 1/512
 T, 1/2206-8, K, 2/446-7, Y, 4/433
 T, 1/2207-8
 T, 1/2207-8
 T, 1/2245, Y, 4/286
 T, 1/2477, K, 2/523
 T, 1/2477, K, 2/523
 T, 1/3174
 B, 5/308-9
 B, 5/308-9
 B, 5/313-6, Y, 1/493
 B, 5/316-331, AN, 2/1185-6, Y, 5/43
 B, 5/313-6, Y, 2/75, I, 11/57-63
 B, 5/316-31, Y, 4/240
 B, 5/316-31, Y, 3/231
 B, 5/316-31
 B, 5/316-31, 5/9, I, 11/57-63
 B, 5/316-31, AN, 1/273, Y, 1/481-2
 B, 5/316-31, Y, 3/355

AN, 1/338, Y, 2/262, AH, 1/405, I, 11/57-63

AH, 1/405, AN, 1/338, B, 5/316-31, Y, 4/439,

I, 11/57-63

B, 5/316-31

B, 5/316-31, AN, 1/251-2, T, 1/2072-3,

B, 5/316-31, Y, 3/36-7, AN, 2/1195

I, 11/57-63

1

ソグド地方の町

T, 2/1483-4

ホラーサーン地方バルフ近郊の町

T, 2/1687, K, 5/236

＜モリスル地方に居住地＞

シンジャールの村（居住地）

AZ, 268-9

AZ, 268-9, K, 6/113

ナシービーン近郊

KH, 2/485-6

Tall Abī al-Jawzā'

ナシービーン近郊

KH, 2/485-6

ナシービーン

KH, 2/485-6

モースルのマイダーン

1

K, 6/317

a1-Baft

?

A2, 395-6

シンジャール

K, 7/462-4

② タグリブ族の移動と勢力變化

五世紀末までのタグリブ族はヤマーマとバフラインを本據としてアラビア半島の各地に分布していたが、シャイバーン族との抗争を通じてサワードからユーフラテス流域に移動を始めた。しかし彼らの勢力が衰えたわけではなく、キンダ王やラフム朝に大きな影響力を及ぼしていた事が跡づけられる。却つて移動によつてヒーラ領域への影響力は増したと考えられる。その後、ヒーラ王との確執もあり、次第にジャジーラに進出して本據としていく。東ローマとササン朝の境界にあるこの地方で、タグリブ族は双方と關係を保つて獨自の勢力圏を確保していったと言えよう。また他のアラブ諸族に對しても優位を獲得し、主導權を獲得していったと考えられる。⁽⁵⁸⁾

六世紀から七世紀初頭にかけて彼らの戦場は本據地ジャジーラではなく、サワードからアラビア半島さらにシリア邊境へと廣がり、殆ど彼らが出撃する形になっている。この點からも彼らがジャジーラを確保し、さらに勢力擴大を圖る状況にあった事が分かる。またラフム朝滅亡以後、サワードはベルシア統治下にあり、際だったアラブ勢力がなかった事も關係があると思われる。一方、シャイバーン(バクル)族はタグリブ族の移動後ヤマーマを確保したと考えられる。しかしイスラーム前夜になると、ヤマーマのシャイバーン族が積極的にサワードに侵出してくる。タグリブ族はイラク・ジャジーラのアラブ勢力と共に當然それを防衛する姿勢を示した。

リッダの際のタミーム族との同盟とヤマーマへの反撃は、ズウ・カール以來のサワードにおけるシャイバーン族との抗争の續きであると言えよう。しかし大征服が始まると、ハーリドの率いるムスリム軍、さらにムスリム側に参加したシャイバーン勢力に連敗を喫し、ジャジーラに押し戻される事になった。しかし戦場はサワードからユーフラテス東岸でまだ本據地は侵害されてはいなかった。タクリート陷落以後、タグリブ族はムスリム政府に歩み寄り始める。そしてジャジーラ征服に際しては、ムスリム軍に協力を表明し、キリスト教徒のままで特別な契約を獲得する。その後彼らはジャジーラにおいては從來からの勢力を維持したと考えられる。

ウマイヤ朝時代のアラブ抗争は、タグリブ族と鄰接するシリアのカルブ族、さらにシリアを追われたカイス族とのジャジーラの居住権を巡る勢力争いであった。西から侵出してきたカイス族との戦いは、ユーフラテス流域からジャジーラ西部で展開し、ハーブル川からサルサル川流域で抗争が繰り返された。タグリブ族は決定的には敗北しなかったにせよ、サルサル川あたりまでカイス族の侵出を許す結果となった。これ以降ディヤール・ムダルでは勢力が衰え、チグリス流域のモースルからナシビーンにかけてのディヤール・ラビーアが彼らの本據地となったと考えられる。従ってアッバース朝時代にはモースル周辺に彼らの活動は限られる事になる。

以上のようにタグリブ族の勢力圏と活動範囲には變化がみられる。結局ディヤール・ラビーアに押し込められていく事になったと考えられる。

③タグリブ族の歴史と勢力變化

前イスラーム時代以來、タグリブ族の歴史は基本的にはアラブ部族間の勢力關係によって展開してきたという事ができる。アラビア半島からジャジーラへの移動に始まり初期イスラーム時代の抗争にいたるまでの歴史は、シャイバーン（バクル）族、さらにキンダ族やラフム族との係わりにおいて展開してきた。タクリット陥落に始まりジャジーラ征服にいたるムスリム政府への歸順は基本的にタグリブ族の勢力に大きな變化をもたらしではない。彼らの大方はキリスト教徒のままジャジーラにおいてほぼ獨立狀況を維持していたと見なされる。

同部族の歴史に大きな變化をもたらしたのは、ウマイヤ朝時代におけるカイス族等の新來部族からの壓力であった。これも基本的にはアラブの勢力抗争である。しかし後者がムスリムであり、たとえ反政府勢力であっても最終的にはイスラーム領域内で身分的優位と領域占據の正當性を主張し得た事に相違があったといえるのではないか。以下ではムスリム支配下におけるタグリブ族の社會的身分とムスリム政府との係わりについて検討したい。

II ムスリム支配下のタグリブ族の状況

(1) タグリブ族への課税

①課税についての史料

ムスリム支配下のタグリブ族に關して最も有名な事は、彼らへの特殊な課税である。法學書及び歴史書には彼らへの課税方法決定に至る経緯と共に、税規定とそれに關する諸説が記載されている。以下では代表的な記録の内容を抄譯して紹介する。

(59)
* Abu Yusuf—番號は内容分類の便宜上附加—

(1) 'Ubadā b. Nu'mān al-Taghlibī → Dāwud b. Kurdūs al-Saffāh → シャイフ達 → Abu Yusuf: ウバーダからカリフ・ウマルへの進言、「あなたは彼ら(タグリブ族)の力を知っているはずである。彼らは敵に直面し、彼らが敵を支援すればやっかいである。何らかの特典を彼らに認めるべきである。」そこでウマルは子供達に洗禮を受けさせないこと、サダカを二倍にすること、人頭税としてのジズヤは免除という條件で彼等とスルフを締結した。既にそのような状況であったが契約はまだだった。

(2) 家畜に關する規定として、羊四〇頭まではサダカの課税対象外。四〇頭から一二〇頭までは羊二頭。それ以上は四頭。牛やラクダに關しても同様で、つまりムスリムへの課税対象全てに關して二倍が賦課される。スルフ締結時に彼らが所有していた土地についても同様。

(3) 子供や痴呆者についての規定。イラク學派—土地に關してはサダカの二倍が徴收されるが、家畜からは徴收されない。ヒジャーズ學派—家畜も土地と同様。以上の課税方法はハラージュの課税方法でジズヤの代わりである。他の財産や彼ら

の奴隸に關しては非課税。

(4) 傳承者→Abū Ḥanīfa→Abū Yūsuf: ウマルはハラージュの代わりにタグリブ族のキリスト教徒に關するサダカを二倍にした。

(5) Ziyād b. Ḥudayr→父→Ibrāhīm b. al-Muhājir→Abū Yūsuf: ウマルが最初にウシュル徴收にタグリブ族へ派遣したのは私(ジヤード)である。(タグリブ族の)ムスリムからは 40dh につき 1dh、ジンマの民からは 20dh につき 1dh、ジンマのないものからは 10dh につき 1dh の計算で徴收した。ウマルの命令「彼らはアラブであつても啓典の民でないのでタグリブ族のキリスト教徒を厳しく扱い、ムスリムになるようにせよ。」既に彼は子供達をキリスト教徒としないという條件を課していた。

(6) Abū Yūsuf: タグリブ族の購入したウシュル地には二倍のウシュルが賦課される。畜取引税も同様。あらゆる物について二倍が賦課される。

* Yahyā b. Ādam⁽⁸⁾——番號は原本の番號——

200 Ibn Abī Laylā Hasan b. Ṣāliḥ→Yahyā→al-Ḥasan→Ismāʿīl: 自領域内のタグリブ族には(徴税のために)使者が送られる。ハサン曰く「彼等以外のジンマの民には使者の派遣はない。」全てのジンマの民からは通過に際して交易税のウシュルが徴收される。

201 al-Zuhri→Yūnus→Ibn Mubārak→Yahyā→al-Ḥasan→Ismāʿīl: タグリブ族及び財産が家畜であるアラブのキリスト教徒を除いて、啓典の民の家畜にサダカは賦課されない。

202 Ziyād b. Ḥudayr→Ibrāhīm b. Muhājir→Sharīk→Yahyā→al-Ḥasan→Ismāʿīl: ウマルは私を派遣し、タグリブ族の財産についてのウシュルの半分の徴收するように命じたが、ムスリムのウシュルやジンマの民のハラージュの徴收は禁じた。ヤフアー曰く「ムスリムとは彼らの中からの改宗者である。」タグリブ族だけがこのようなスルフを結んだのであり、

それ以外のジンマの民はウシユルとは關係ない。⁽⁶¹⁾

602 Dāwud b. Kurḏus→al-Saffāh→Abū Ishāq al-Shaybānī→Abū Bakr→Yahyā→al-Ḥasan→Ismā'il: ウマルのスルムの條件は、サダカを二倍にし、イスラームへの改宗を妨げないこと、子供達に洗禮を施さないこと。

603 'Uḡada b. Nu'mān al-Taghlibī→Dāwud b. Kurḏus→al-Saffāh→Abū Ishāq al-Shaybānī→'Abd al-Salam b. Ḥarb→Yahyā→al-Ḥasan→Ismā'il <Yusuf (I) の同様>

604 Dāwud b. Kurḏus→al-Saffāh→Abū Ishāq al-Shaybānī→Abū Mu'āwiyā→Yahyā→al-Ḥasan→Ismā'il: ウマルは少年に洗禮をしないこと、二倍のサダカの支拂い、彼らの宗教以外の宗教を信奉しないことを條件にスルフを締結した。ダーウド曰く「現在タグリブ族にはジンマはない。彼らが洗禮を行ったからである。」

605 Yahyā: タグリブ族の男女は共に人頭税はなく土地税があるという同じスルフの状態である。税は負債の有無に関わらず全體として徴收される。

610 子供達に關する諸説—ムスリムの少年からはウシユルが徴收されないの、土地と家畜兩方とも課税されない。他説、ムスリムの孤兒も喜捨をするので彼らからも徴收される。タグリブ族のサダカは他の者のハラージュに相當し、一括徴收されてムスリムの喜捨税の對象となる物全てに關して二倍が賦課される。ラクダ五頭については羊二頭、羊四〇頭に關しては羊二頭、牛三〇頭に關しては子牛二頭、流水または天水灌漑地では五 wasq につき一／五 wasq、水車灌漑地では一／一〇になり、この計算に増減はない。

611 Ziyād b. Ḥudayr→Abū Ḥusayn→Abū Bakr b. 'Iyāsh→Yahyā→al-Ḥasan→Ismā'il: 私はタグリブ族からのウシユルを往路と歸路で徴收していた。これに對して彼らの長老達はウマルへ訴え、ウマルはウシユルを一度だけ徴收するように指示した。⁽⁶²⁾

* al-Baladhuri—番號は便宜上附加——⁽⁶³⁾

(1) al-Saffah al-Shaybani→al-Mughira→Abū 'Awāna Shayban b. Farrūḥ: ウェルがジズヤを徴收しようとするタグ
リブ族は逃亡し、一部は遠隔地にまで至った。そこで al-Nu'mān b. Zur'a または Zur'a b. al-Nu'mān⁽⁶⁴⁾ がウマルに進
言した。「彼らはアラブの民でジズヤを支拂うには誇り高すぎる。彼らは非常にやっかいな民であるから敵に回して敵を
利するなかれ。」そこでウマルは彼らを呼び返し、サダカの二倍を課した。

(2) Ibn 'Abbās→Sa'id b. Jubayr→傳承者→Layth b. Sa'd→'Abd al-'Aziz b. Muslim: タグリブ族が屠殺した家畜攝取
及び彼らの女性との結婚禁止。理由は彼らはムスリムでも啓典の民でもないから。

(3) Abū Minkafī→'Awāna b. al-Hakam→父→'Abbās b. Hisham al-Kalbi: 'Umayr b. Sa'd⁽⁶⁵⁾ からウェルへの報告―彼
はユーフラテス川沿いの諸砦を征服し、同地方のタグリブ族に改宗を要求したが、彼らは拒否してローマ領へ移住しよう
としている。ウマルの返信―ムスリムが土地と家畜に支拂っているサダカの二倍を彼らに賦課し、拒否したら彼らが絶滅
するか改宗するまで戦え。結局タグリブ族は二倍のサダカを受諾したが、こう主張した。「非アラブのようなジズヤでな
い限り我々は支拂いに甘んじて信仰を保持する。」

(4) Dāwud b. Kurduṣ→al-Saffah→Abū Ishāq al-Shaybani→Abū Mu'āwiyā→'Amr al-Naqid: 〈Yahyā⁽⁶⁶⁾と同様〉但
し、タグリブ族がローマ領へ移住しようとしたのでこの様なスルフを締結したこと、彼らの宗教を強制しないということ
がスルフの條件に附加されている。

(5) 〈Yahyā⁽⁶⁶⁾と同様〉但し、Yahyā→al-Husayn b. al-Aswad

(6) Zur'a b. al-Nu'mān→al-Saffah b. al-Muhannā→Mughira→Hushaym→Sa'id b. Sulaymān Sa'dawayh: ズルアの
ウマルへの進言「タグリブ族はアラブであり、ジズヤを納めるには誇り高すぎる。彼らは耕作地と家畜の所有者でもあ
る。ウマルがジズヤを徴收しようとしたので彼らは逃散しようとしている。」そこでウマルは彼らと以下の条件でスルフ
を締結した。ムスリムの土地と家畜に課せられているサダカの二倍の支拂い、子供達にキリスト教を強制しないこと。ム

ギーラの傳によるアリーの意見「もしタグリブ族の件を任されるなら、私は彼らの戦闘員を殺し子供を捕虜とする。彼らは子供達に洗禮を施したことで契約を破ったのでジンナは撤回されたからである。」

(c) 〈Yahyā 同様〉但し Sharik→Abū Nasr al-Tammār。ヤンヤアの解説部分なし。

⑥ Muḥammad b. Ibrāhīm b. al-Ḥarith→ʿAbd al-Malik b. Nawfal→Ibn Abī Sabra→al-Wāqidi: ウズマーンは金貨と銀貨のみでタグリブ族からジズヤを徴収しようとしたが、ウマルの二倍のサダカの規定を知って撤回した。

⑦ al-Wāqidi, Sufyān al-Thawrī, al-Awzāʿī, Malik b. Anas, Ibn Abī Laylā, Ibn Abī Dhīʿb, Abū Hanīfa 傳: ヤンヤアの言として〈Yusuf 同様〉、但し、他の財産と奴隷の非課税の記載なし。

(99)
* al-Ṭabarī——番號は便宜上附加——

(1) Muḥammad b. Ṭalḥa, al-Muhallab, ʿAmr, Saʿīd→Sayf b. ʿUmar→Shuʿayb→al-Sarī: (タタリット征服以後) ʿAbd Allāh b. al-Muʿtamm の使節には ʿUtba b. al-Waʿl ʿ Dhū al-Qurt ʿ Ibn Dhī al-Sunayna ʿ Ibn Ḥujayr ʿ Bishr がいた。タグリブ族に關してウマルが彼等に提示した契約條件——イスラームを受け入れる者にはムスリムと同等の權利と義務を賦課。但し改宗の強制はアラビア半島にいるアラブに對してのみである。これに對する使節の返答「これでは彼等は逃げ出して部族から離れ、ペルシア人になってしまう。サダカが一番良いだろう。」ウマルはジズヤ以外はないと返答。使節の應答「タグリブ族の要望は彼等のジズヤをムスリムのサダカと同様にすることである。」結局契約條件は、改宗した父から生まれた新生兒をキリスト教徒としないということになった。

(2) イスナード同上。(同年ジャシラ征服の際に) 味方に付けたタグリブ族に對して al-Walīd b. ʿUqba は(ムスリム軍への参加のためには)イスラームの受容を條件として要求したが、彼等は以前の Saʿd b. Abī Waqqās のスルフとそれを締結した代表者を、全てのタグリブ族が認めているわけではないと主張した。そこでこの件に關してワリードはウマルに諮問した。ウマルの返答「イスラームの受容以外では受け入れられないのはアラビア半島のアラブのみである。タグリブ族

に關しては新生兒をキリスト教徒としないという條件で受け入れよ。」そこでワリードは新生兒をキリスト教徒としないこと、イスラームを受容する者を妨げないことを條件として彼等を受容した。タグリブ族の一部はこれを受け入れたが、一部は拒否した。

(3) al-Sarī → Shu'ayb → 'Atīya → Abū Sayf al-Taghlibī: 神の使徒はタグリブ族の使節と契約し、新生兒をキリスト教徒としないことを條件づけた。しかしそれは使節とそれを派遣した者たちに該當する規定で他の者には該當しない。ウマルの時代のタグリブ族内のムスリムの言「税⁽⁶⁷⁾によって非ムスリムのタグリブ族を排斥すれば、彼等は立ち去るだろう。しかし彼等のサダカを二倍にすればジズヤの代わりとなる。彼等は父親がイスラームを受け入れた場合新生兒をキリスト教徒としないという條件でジズヤを記録したことに腹を立てている。」(これに關して)ムスリムと非ムスリム双方のタグリブ族の使節がウマルと交渉。ウマルはジズヤ以外では受け入れないし、たとえローマ領域へ逃走しても皇帝に交渉して捕まえると返答。そこで使節はジズヤという名稱を使わないように要求するがウマルは拒否した。この時アリーがサアドが二倍のサダカで彼等と契約したことをウマルに忠告し、ウマルはそれを受け入れて彼等の支拂いを受け取った。當時タグリブ族には力と拒絶力があり、ワリード(ジャジラのアラブの長官)を悩ませていた。

② 契約成立に至る経緯

上記の記録より、タグリブ族との契約は三度に亘つてなされたと考えられる。まず、預言者との契約、タクリート征服に際してムスリム軍に歸順し改宗を表明した者達の契約、さらに二倍のサダカを定めたと考えられるウマルとの契約である。預言者との契約は、一〇/六三一年頃他の部族や都市からの使節の到來とほぼ同時期に、メディナにやってきたタグリブ族の使節との契約である。しかしタバリーにもあるように、タグリブ族のごく一部の者との契約で、使節を派遣した集團以外には該當しないものと見なされている。⁽⁶⁹⁾

次にタクリート陥落に際して、または陥落後に締結された契約である。この契約に關しての記録も同様に少ない。締結に至る経緯はT(1)に詳しい。そこではウマルと契約が結ばれたように書かれているが、他の記録ではサアドとの契約となっている。I章で述べたように、サアドが派遣したイブン・ムウタツムは、籠城軍のアラブ部隊に内通を呼びかけた際に、助命とムスリム軍への参加の條件として改宗を義務づけた。この時のアラブ部隊との約束を基礎とし、タクリート陥落後にメディナへ派遣された使節に對してウマルがそれを批准したと考えてよい。この時ウマルに對して改宗者の使節は、同族の者が彼らに同調してムスリム側につくように、キリスト教徒のままで彼らと同等の扱いを受けられるよう改定を申請したと考えられる。しかしウマルはこれを拒否し、却って歸順者の改宗を完全なものにする爲に「父親がイスラームを受け入れた場合、彼らから生まれるものにも洗禮を施さない」と附加條件を定めたのである。

第三の契約に關しては史料が豊富であるが、成立理由としてウマルへの進言説とタグリブ族の東ローマ領域への移住が原因とする説が見られる。進言者としては *‘Ubāda b. al-Nu‘mān al-Taghlibī* と *Zur‘a b. al-Nu‘mān al-Taghlibī* の名前が上がつているが、ズルアの名前をあげているのは *Baladhuri* だけであり、傳承の古さと傳承経路からみてウバード説が有力といえる。⁽⁷⁰⁾ 改定を進言した理由としては、(1)タグリブ族は強力であり、敵側につくと厄介である點、(2)アラブとしての誇りからジズヤを不満としている點、(3)タグリブ族が東ローマ領へ移住しようとしている點があげられている。さらにT(3)では改宗者の新生兒をキリスト教徒としないという條件に不満がある點が指摘されている。移住に關してはジャジーラ征服に際して大規模な移住を行ったのはイヤード族で、タグリブ族はムスリムもキリスト教徒も大方が残留して、ワリード・ブン・ウクバの軍への協力と参加を求めたと確認できる。その際にワリードがタクリート攻撃の時のように改宗を要求したので問題が起ったのである。おそらく彼らの一部の移動はあったと考えられるが、やはり契約改定の最大の理由は、税の支拂いやムスリム政府の干渉をできるだけ排除しようとするタグリブ族と、新たな支配者としての權威を認めさせようとするムスリム側の駆け引きによると見なすのが妥當であろう。

結果としてジズヤを廢する代わりに課税額をムスリムのサダカの二倍とし、これから生まれる新生兒に洗禮を施さないという新規約が成立し、それを基礎としてイスラームへの改宗を妨げない事、彼らの宗教（キリスト教）以外を信奉しないという條項がつけ加えられたと考えられる。交渉はワリードとなされたという説とウマルと直接なされたという説があるが、Ysauf(1)他にあるように、ウマルの助言を聞いてワリードが契約し、それをウマルが追認したのではないだろうか。その際タグリブ族側は、ムスリム・キリスト教徒双方を含んだ使節を派遣したという點が注目される。

實際はこの契約ですら不満として受け入れないものがあっただけでなく、新生兒をキリスト教徒としないという規定は明らかに守られなかった。故に法律上タグリブ族のジンマは撤回され、イスラーム領域に彼らが存在する事自體非合法だったのである。従って二倍のサダカ規定に關しても、實効性があっただろうか疑問である。

③ 税徴收の方法と徴税に關する問題

史料にあるように、タグリブ族のサダカは特別の徴税官が派遣されて徴收された。これは非ムスリムのジンマの民の中では特別な扱いであると強調されている。家畜を財産とするアラブからは、征服地の住民のように既存の制度を利用して税を徴する事が出来なかったためであるが、ムスリムからのサダカ徴收とは別の人物が派遣されていた事が注目される。課税品目にはムスリムにとって課税對象となつてゐるものは全て含まれてゐるが、男女・負債の有無に係わらず一括徴收とされている。當然ではあるが、個人ではなく集團單位で査定されていたと見なしてよい。家畜・生産物に關しては現物納で、またウシュルの徴税は二回に分けられていたものがウマルによって一回に變更された。これはタグリブ族からの訴えによるので、何らかのトラブルや不正があつたのかも知れない。ウマルの命令のように、彼らに關しては特に嚴格な姿勢で徴税がなされたと考えてよいだろう。

タグリブ族の徴税に係わる事件は幾つか伝えられている。七三／六九二—三年のビシュルの戦いの原因もその一つである。タグリブ族の詩人 al-Akhial がアブド・アルマリクにカイス族のリーダー達を中傷するような詩を獻じ、それを激

怒した al-Jahhāf b. Hukaym al-Sulamī が、カリフの下にあったタグリブ族とバクル族の税に關する見積書を見て、書記を抱き込んで徵稅契約書を捏造し、徵稅の任に命じられたかのように見せかけた。それを持って彼はカイス軍を集め、アフタルの一族を攻撃したという。この事件は基本的にカイスとタグリブの部族抗争の一つではあるが、タグリブ族への徵稅官が少なくとも軍事力を行使する權限を有していた事を示している。⁽⁷²⁾

さらに一七一／七八七年、ラシードによって任命されたサダカ徵稅官 Ruḥ b. Ṣaliḥ al-Hamadānī がタグリブ族によって殺害されている。彼は四〇〇〇名を率いてシンジャールの al-Najdiyya 村のタグリブ族の下に向かったが、彼らは逃走し軍を集結して反撃し、ルーフとその配下を殺害したという。他説ではルーフはモースルの駐屯軍の指令官であり、タグリブ族に對して出撃したが殺害され、その報を聞いた彼の息子 Ḥatīm が al-Ḥusayn b. al-Zubayr b. Ṣaliḥ がモースルの住民軍と共に出撃し、タグリブ族の一團を殺し捕虜を得たという。さらに彼はニザール族の領域である Banu Usayd を攻撃してタグリブ族を打破、そのためモースルにいたニザール族（タグリブ族）は同市から離れ、ラビーア族とムダル族の下へ行って同盟し、モースルへ戻ってきたという。そして一九七／八一二年に兩軍の間でモースルのマイダーンの戦鬪がなされたという。⁽⁷³⁾

これらの事件から見ても、タグリブ族からの徵稅には武力行使の必要が認められ、また實際に必要であったと考えられる。タグリブ族とムスリム政府の間の駆け引きと緊張關係は、後代まで續いていたと考えられる。

(2) タグリブ族のキリスト教會

① タグリブ族の教會とその變化

イスラーム以前からタグリブ族は獨自のキリスト教徒共同體を形成していたが、彼らの教會については餘り分かっていない。イスラーム以後のタグリブ族の主教として Michael the Syrian は以下の名前を傳えている。⁽⁷⁴⁾

總主教 Cyriacus 時代 (793—817) の Dāwud (ジャジールとモースル地方のタグリブ族の主教)・‘Uthmān (ジャジールのタグリブ族の主教)・總主教 Dionysius Tell Mahre 時代 (818—45) の Iohannan (タグリブ族の主教)・Thoma (タグリブ族の主教)・Joseph (Marzūq) (タグリブ族の主教)・Ḥabīb (タグリブ族の主教)・Georgius (タグリブ族の主教)・總主教 Iohannan 時代 (846—73) の Iacobus (タグリブ族の主教)・Baachus (タグリブ族の主教)・Iohannan (モースルからジャジールにいるタグリブ族の主教)・總主教 Iohannan 時代 (965—85ca.) の Theodoros (Neirāyē とタグリブ族の主教) である。

これらの主教は遊牧民 (Ma'dāyē) の主教やアラビアの主教から區別されており、彼らがアラブ遊牧民の中で独自の主教座を持っていたことは確かである。⁽⁷⁵⁾ また總主教ディオニシウスは八一八年から八四五年の間に四人のタグリブ族の主教を敍任しているが、その間八三四年に彼が召集した主教會議にタグリブ族の主教として ‘Uthman が参加している。この事から Honigmann はタグリブ族の二つの主教座の存在を主張しているが、可能性としては有り得るものの確認は難しい。⁽⁷⁶⁾ テオドルス以降、ミハエルはタグリブ族の主教の名をあげていないので、おそらく獨立の主教座を失って近隣の主教座に併合されたのであろう。

タグリブ族主教座の盛衰には、教會内部の混亂も係わっていたと考えられる。アブド・アルマリクの時代、總主教 Iurianus は彼以前の總主教の許可なく敍品を受けた者の問題への對處に苦慮し、その中にタグリブ族の主教 Josephus の名前があげられている。そのためヨセフスは追放され、他の者がその地位に就任したという。⁽⁷⁷⁾ ウマイヤ朝時代からアッバース朝にかけてのジャジールの單性論派教會の全般的混亂と衰退にも關係して、タグリブ族の主教區は次第に獨立性を失っていったと見なしてよい。

② タグリブ族の殉教物語

イスラーム創設からアラブの大征服時代にかけて、タグリブ族の一部がイスラームを受容した事については既に述べた。それ以降、タグリブ族からの集團としての改宗に關しては言及がない。ウマイヤ朝時代まではジャジールのタグリブ

族の大方はキリスト教徒であつたといわれ、ジャジーラのタグリブ族勢力が健在であつた間は、イスラーム化はあまり進
行しなかつたと考えられる。⁽⁷⁸⁾

しかし第二次内亂以降、ムスリムアラブ勢力の進出によって彼らのジャジーラにおける優位が失われるにつれて、彼らのキリスト教徒共同体に對するムスリム政權からの壓力が強まっていた。ジャジーラのキリスト教徒及びタグリブ族に係わる改宗強制の記録はワリード一世時代(705—15)に現われてくる。以下でその一例を紹介する。

Muhammad b. Marwan (ジャジーラ總督 73/692—91/709—10) は悪行や殺戮の他にもキリスト教のアラブ達を殉教せよとした。彼は Mu'adh というタグリブ族の首長を呼びつけ、彼にムスリムになるか殉教するかを迫った。彼が譲歩しないと泥の穴の中に拘禁し、その後穴から出して再び甘言で改宗を誘った。しかし彼は同意しなかつたので、殺害して埋葬せなかつた。數日後も彼の遺體は朽ち果てる事も獸に食べられる事もなく、はきだめに横たわっていた。そこでダーラーの Eustathius が彼の遺體を求め、運び出して彼の墓の上に修道院を立てた。⁽⁷⁹⁾

同様な話はワリード自身の迫害としても伝えられている。七一年、カリフはタグリブ族の聽罪司祭 Sham'alla にアラブの首長が十字架の徒であることは恥なので信仰を捨てて事を強制した。彼は自分がキリストを否定したならタグリブ族の者もまたキリストを否定し地獄へ導かれるとして拒絶した。この言葉を聞くとワリードは彼の顔を引きずつて外に出し、自分の肉を食べさせると脅したが彼は屈しなかつた。そこでカリフは彼の腿の一片を切り取るように命じ、奴隸達がそれを火であぶって彼の口の中に入れた。彼はそのままで生き續け、人々は彼の遺體にその傷を見いだしたという。⁽⁸⁰⁾

以上の話は殉教物語として脚色されて伝えられているが、タグリブ族社會へのムスリム政府からの干渉と壓力が強まつた時代背景を反映するものとして貴重であらう。第二次内亂による彼らの勢力後退の後の時期に、これらの話が生まれている事は注目に値する。

まとめとして

本稿で検討してきたように、前イスラーム時代からイスラーム以後の數世紀間におけるタグリブ族の歴史展開を基本的に動かしてきたのは、アラブ部族間の勢力抗争であったと考えられる。キンダ王國やラフム朝さらにササン朝時代において、彼らの對抗勢力はアラブの傳統的信仰の保持者・ネストリウス派・單性論派全てに及んでいるが、何れにせよ信仰の相違が彼らの社會的身分に影響を與える事は殆ど無かったと言える。しかし部族間抗争がムスリム政權下で展開する様になった事は大きな轉換をもたらした。アラブの改宗が進行する中で、おそらくジャジーラにおける優勢を背景として、タグリブ族の大方はキリスト教に固執した。しかしそれによってムスリム領域における彼らの法的・社會的位置づけは、他のアラブ勢力とは大きく異なる事になった。

ウマルの契約にも係わらず、タグリブ族が既存の勢力を保持していた間は、彼らの社會に實質的變化は無かったと考えられる。しかし新來のムスリムアラブのジャジーラ進出によって、タグリブ族の勢力後退が明らかになった頃から、ムスリム政權からの干渉が顯著になってくる。結局彼らの活動範圍はモースル周邊に縮小され、彼らのキリスト教徒共同體も衰退に向かったと考えられる。タグリブ族は少なくとも十一世紀頃までは、キリスト教徒アラブとして知られている。しかし彼らのジャジーラ社會全體に對する影響力は既に失われていたと考えられる。

本稿では西アジアのイスラーム化研究の一事例として、ジャジーラのキリスト教徒アラブの問題を取り上げた。ここでは同地方の定住民には觸れなかったが、タグリブ族の動向は、ジャジーラ全體のキリスト教徒社會の變化に影響を與えていたと考えられる。ジャジーラは最もイスラーム化の遅れた地域の一つと見なされているが、キリスト教徒アラブの存在が、ジャジーラのキリスト教徒社會の存續の一因となっていた事は確かであろう。

- (1) タクリン族の系譜に關しては、'Umar Riḍā Kaḥḥālā, *Mu'jam Qabā'il al-'Arab*, Beirut, 1985, 1/120-22. Ibn Ḥazm, *Jamhara Ansāb al-'Arab*, Beirut, 1983, 303-07, al-Qalqashandī, *Nihāya al-'Arab fī Ma'rifa Ansāb al-'Arab*, Beirut, 1984, 185-6, al-Nuwayrī, *Nihāya al-'Arab fī Funūn al-Adab*, Cairo, 2/333-4, Ibn Durayd, *Kitāb Ishṭiqāq*, Beirut, 1979, 335-6, EI, 9/223-7.
- (2) H, 53, 163, 178, idem, *Kitāb al-Buldan*, BGA V, Leiden, 1967, 28, AN, 1/85, IH, 19, al-Iṣṭakhri, *Masālik al-Mamālik*, BGA I, Leiden, 1967, 14 他參照。
- (3) チグルス・ユーフラテスに挟まれた領域で、その兩岸も含み、ディヤールラビーン、ディヤールムダル、ディヤールハクルに三分される。北部はタウルス山脈でスグルに接し、南限はタクリートーアナー（またはハダサ）ラインでイラックと接す。IH, 205-30, G. Le Strange, *The Land of the Eastern Caliphate*, 85-114 等參照。
- (4) 單性論派はタクリート・Mar Mattai' ネストリウス派はナシーブーンが中心地であった。Ya'qūb Bardāyā'がササン朝君主の承認を取り付けて以降、前者は次第に優位を獲得していった。Aḥūdemnehのフラブ部族への布教は五五九年頃。F. Nau, *Histoire d'Ahoudehneh et de Marouta*, PO, III, 1982, Turnhout, 26-30, J. S. Trimmingham, *Christianity among the Arabs in Pre-Islamic Times*, London, 1975, 163-178, また初期イスラーム時代にシリアから單性論派住民が大舉流入し、イスラーム以後も單性論派の勢力擴大が見られたことが知られる。O. Graber, Notes on the Jazirah in Early Islamic Times, American Oriental Society Middle East Branch, Semi-Centennial Volume, ed. D. Sinor, Indiana Univ. Press, 1969, 89-98.
- (5) IH, 19, al-Iṣṭakhri, *op. cit.*, 14, H, 132, 170.
- (6) Trimmingham, *op. cit.*, 171-4.
- (7) AN, 1/75, T, 1/2508-9.
- (8) この時代で最も数の大方はキリスト教徒だったことが、I, 20/127.
- (9) シュメールに關しては C. Cahen, Fiscalité propriété, antagonismes sociaux en Haute-Mésopotamie au temps des 'Abbasides, *Les peuples musulmans dans l'histoire médiévale*, Damascus, 1977, 405-422, M. G. Morony, *Iraq after the Muslim Conquest*, Princeton Univ. Press, 1984, Trimmingham, *op. cit.*, O. Grabar, *op. cit.*, M. Canard, *Histoire de la dynastie des Hamdanides de Jazira et Syrie*, Damascus, 1983 等參照。
- (10) 以下地名に關しては、本稿Ⅰの(2)の表を参照の事。他説ではベルシバ領域と東ローマの邊境偵察基地の間。ベフラインのタクリン族の一部を Dārin へ移動させたという記録は、ベフラインとヤバーマに居住していたタクリン・'Abd al-Qays・ベクル族や Kirmān とハマルス地方の Tawwaj とハフワースに居住させたという記録がある。T, 1/839,

- ラのタグリブ族領域に逃れた。YA, 1/258. イヤード族はそこで彼らの影響でキリスト教徒となったという。しかしタグリブ族に侵害され、さらに移動している。
- (22) アブラハのナジード攻撃に際し、その傘下の Zuhayr b. Janāb al-Kalbi がヤマンの人々と共にタグリブ・バクル族と戦闘を交えている。K, 1/504-5.
- (23) シャイバーン族の首長、サワード攻撃で有名。
- (24) 以上 MS, 241, K, 1/488-9, 647-8 参照。
- (25) 他に一〇/六三—二二年ムスリムとキリスト教徒からなる十六人のタグリブ族の使節が預言者の下に到来し、子供達をキリスト教徒の洗禮を受けさせない事を條件に、キリスト教の信仰を保持したままでのスルフを締結し、この時ムスリムには報償が與えられたという記録もある。彼らの契約については後述。Ibn Sa'd, *Ṭabaqat al-Kubrā*, Beirut, 2, 1/316.
- (26) サジャーフはムサイリマと結婚し、ヤママの穀物収入の折半と彼女のジャジールへの歸還を條件に講和した。彼女はその半分を手にし、他の半分の受け取りのためにフザイルとアッカとワッサーブを残したという。敗戦後彼女はイスラームに改宗し、ジャジールに向かってジャマアの年にムアウィヤがバスラに彼女を移すまでそこにいた。またはジャジールのタグリブ族の下で没したという。T, 1/1908-21, K, 2/354-7, 1, 18/165-7.
- (27) フラブ部隊はナミル族のフッカが率づつた。YA, 2/150-1, T, 1/2062, K, 2/384-5.
- (28) 捕虜はメディナに送られた。YA, 2/150-1.
- (29) Rabī'a b. Bujayr al-Taghlibī はフッカと不和になり、同地に離れつた。T, 1/2072-3, K, 2/388-9, 407.
- (30) T, 1/2073-4, K, 2/389.
- (31) T, 1/2190-3, K, 2/443.
- (32) カベース住民は全てタグリブ族で、Faris b. 'Unab al-Taghlibī が率づつた。
- (33) T, 1/2206-8, K, 2/446-7. さらにムスリム軍は一四/六三五年に Fayyūm においてもタグリブ族とナミル族を襲撃つづつた。T, 1/2244-5, K, 2/458.
- (34) 一五/六三六年のタバリーの記録ではキンナスリーンの開城の後、ムスリム軍がジャジールとシリヤ兩方から東ローマ領進攻を企畫した時、al-Walid b. 'Uqba はタグリブ族とジャジールのフラブ部族を率いて後方防衛のために、ジャジールに残って各地を踏破していったという。ラッカやハッラーンやナシールビンの住民や貴族達は侵入軍が歸還するまでその目的を知らなかったという。しかしこれはタクリートの陥落の後ジャジール各都市の制覇がなされるまでの出来事と思われる。T, 1/2394. キンナスリーン陥落からジャジール征服が始まるまでの経緯について W. E. Kaegi, *Byzantium and the Early Islamic Conquest*, Cambridge, 1992, 147-80 を参照。
- (35) この時のフラブ部隊の指導者は、Sa' b. Jusham 族の 'Utha b. al-Wa'il, Dhū al-Qurt, Abū Wadā'a b. Karīb, Ibn Dhī al-Sunayma, Ibn al-Hujayr al-Iyādī, Bishr b. Abī Ḥawī である。T, 1/2474-77, K, 2/523.

(36) T, 1/2482, 2489-90, K, 2/527. アサド・ガタファーン・ムハーリブ・ナミル・ドゥバイア・タグリブ族がクーフア七分隊の五番目を構成した。T, 1/2495. クーフアのタグリブ族の中からは、フリー派の 'Ubayd Allah b. Ziyād 殺害にも関與した Sharik b. Jadir al-Taghlibi や、マンスールの側近でシンド總督にまでなつた Hishām b. 'Amr al-Taghlibi 等の有名人が出てゐる。ウマイヤ朝後期に東方邊境で活動したタグリブ族もその子孫に當たる。アッバース朝期にモースル總督に任命された 'Umar b. al-Khatīb 家等の有力者も彼らの子孫と考えられる(後述)。

(37) イヤード族は Abū 'Adīy b. Ziyād に率いられた四〇〇名以外の者が移住。ウマルは東ローマ皇帝に書簡を出し、移住したアラブを歸還させなければムスリム支配下のキリスト教徒との契約を破棄し追放すると通告した。そこで皇帝はアラブを追放したが、彼らは歸還せずシリアとジャジーラに接する東ローマ領域で散開したと云う。T, 1/2507-11.

(38) クーフアのタグリブ族がムアーウィヤとの戦いでアリー側についた事が記録されている。さらにシッフィーンを目指してジャジーラに向かうアリー軍にタグリブ・ナミル族の者が加わつたという。T, 1/3174, YA, 2/218.

(39) カルブ族及びカイス族とタグリブ族の諸戦鬪に關しては、B, 5/313-331 及び I, 20/125-8, 11/57-63 に詳し。

(40) *ibid.*, 11/62. タグリブ族はアゼルバイジャンの同族の移住者に支援を求め、al-Shu'ayh b. Muhayl (Muhī) に率いられた二〇〇〇名がジャジーラに到來、ウマイルとの戦鬪に

參加した。

(41) ウマイルはムスアブにシリア歸還許可を求めたようだが、後者は既にシリア諸都市にはクダア族を入れたので(彼を任命する餘地がなく)、大方がキリスト教徒のラビーア族のハイイ(タグリブ族)しか残っていないと知らせた。そこでウマイルはタグリブ族のワリーーへの任命を求めたという。*ibid.*, 20/126-7.

(42) *ibid.*, 20/127.

(43) ズファルは息子 Hudhayl の進言でタグリブ族との戦いに出發した。タグリブ族はモースルの近郊に集結していたがチグリス川方面に撤退し、ズファルはクハイルで彼らに追いつき戦鬪となつた。戦いにはウカイル族(カイス系)も參加している。タグリブ族の内川を渡り得た者以外は殺されるか捕虜となり、ズファルは女達の腹を裂き、溺死者も多數であつたという。敗走兵はリバーに到達したが、ズファルはフザイルを派遣して彼らを打破した。この戦いでタグリブ族の詩人 al-Qutami がズファルの捕虜となつてゐる。B, 5/326-8, I, 11/58.

(44) B, 5/327-31, I, 11/59-61. 戦いの原因については後述。ルハープ近郊の山の名から Makhsin の戦いとも言われる。ジャハーフはトレビゾンド、Kamkh 及び Qalqala に滞在し、カイス族の仲介でアマンを得た。カリフは兩部族間の和平仲介の責任を息子のワリードに委ねたという。ジャハーフは血の復讐金を課されたのでハッジャージュに援助を求め、一〇萬ディルハムを借り受けたという。その後ジャ

ッハーフは禁欲生活に入ったという。

- (45) 第二次内亂以後の同部族に關しては、Muhammad b. Marwān 及びワリード1世による改宗強制の記録(後述)、『東方國境領域における征服戦への参加やアラブ抗争への關與の記録等がある。T, 2/1189-90, 2/1483-4 参照。

- (46) 例をあげると、ウマイヤ朝時代だけでも六九二年の戸籍調査、Muhammad b. Marwān 時代のキリスト教徒壓迫政策と流民調査、Maslama b. 'Abd al-Malik の戸籍調査、ワリード1世時代の非ムスリム壓迫、ウマル2世の宗教政策と教會特權の廢止等が續く。さらに同地方への統制強化はアッバース朝時代にも受け繼がれていく。

- (47) この他アッバース朝政府内のムスリムタグリブ族の個人的記録もある(注(36))。一方、キリスト教徒史料には自然災害の際の彼らの移動の記録がみられる。七七一三年のモースル地方の旱魃と飢饉に際して、タグリブ族とアラブ游牧民が家畜と家族・荷物を全て持って北へ移動、定住地域に侵入したために牧草地が荒廢し、續く冬季に家畜が死滅、耕作地も都市部も荒廢した。そのためモースル住民も北へ移動したという。翌年、旱魃によって同様な移動が起こり、タグリブ族等は北部だけでなく南部へも侵入し破壊したという。PS, 2/319, 2/333. 自然災害による同様の侵害は四〇一／一〇一年も發生。BH, 1/185, 2/205.

- (48) 前述のアゼルバイジャンからのタグリブ族はハワールジヤ派であったという記録がある。

- (49) KH, 2/485-6, T, 2/630, AZ, 281, K, 6/141-3, Ibn

Khallikān, *Wafayāt al-A'yān*, Beirut, ? 6/31-34, al-Yaḥī, *Mirāt al-Junūn wa 'Ibra al-Yaqzān*, Haiderabad, H. 1337, 1/371-2, al-Dhahabī, *Tārīkh al-Islām wa Wafayāt al-Mashāhīr wa al-'Alām (171-180)*, Beirut, 1990, 20. 但しイン・ハリーカーンではワリードはシャーン族出身とする。彼の出自に關しては諸説あり。

- (50) AZ, 350-1.

- (51) AZ, 326. ファビース朝革命期の一三三／七四九一五〇年にモースル統治者の一人として Hishām b. Ahmad al-Taghlibī の名前がみられる。T, 2/47, 'Umar b. al-Khatīb 家はイスラーム時代のタグリブ族の有力三家の一つである。詳しくは IK, 2/228 参照。一九八／八一三—四年にはアッマドがナシーブーンを征服してワリーとなつてゐる。YA, 2/540.

- (52) K, 7/188, IK, 2/228.

- (53) K, 7/269-71, IK, 3/310, 4/228-9, AZ, 88. また、二六七／八八一一年 Ishāq b. Kundajīq に対する上記の彼と 'Isa b. al-Shaykh 及び Abu al-Mughira 及び Hāmdān b. Hāmdān がジャジラの支配權を巡つて戦つた際にもラビーン・ベッタル・タグリブ・ヤマン族が參戰。T, 3/1191-2, K, 7/362, IK, 4/228-9. その後イスハークはアッバース朝に反旗を翻し、ムタディンによつて殺害されてゐる。彼の後任には 'Abd Allāh b. al-Haytham al-Taghlibī が就任。

- (54) K, 7/359-60.

- (55) *ibid.*, 7/462-4, 7/472.

- (56) 特異な例として二七九／八六二三年のモースル住民と同市の總督 Harun b. Sīmā の抗争に際しては住民がハワールジヤ派とタグリブ族に支援を求めている。IK, 4/229.
- (57) ハムダーン朝の出自に關しては、タグリブ族説、タグリブ族のマウラー説、クルド人説等様々な記録がある。IH, 221, IK, 4/228-9, H, 133, Ibn Khallikān, *op. cit.*, 2/114, E12, 3/126-31, Canard, *op. cit.*, 287-91.
- (58) イヤード族に關しては既に述べたが、ナミル族はジャジール北部に勢力を移動していった。
- (59) Yūsuf, 120-1.
- (60) Yahyā, 61-4. また原本番號 63 64 65 66 ではタグリブ族の土地と商品に關するムスリムとの取引及び所有權の移行、改宗時のウシュルの變化についての規定、61 62 は交易税に關する細目。Yahyā, 24, 26, 29, 65-6.
- (61) イトイスナードの異なる同内容の記述が續く。603 Ziyād b. Hudayr → Ibrāhīm b. Muḥājir → Isrā'il → Yahyā → al-Ḥasan → Ismā'il° 604 Ziyād b. Hudayr → Ibrāhīm b. Muḥājir → Sufyān b. Sa'īd → Yahyā → al-Ḥasan → Ismā'il° 605 Yahyā 606 下同く内容。
- (62) 615 ハマーンの手紙と 616 Ziyād b. Hudayr → Jamī' b. Shaddād → Abū Ishāq al-Shaybānī → Abū Bakr → Yahyā → al-Ḥasan → Ismā'il の傳承で傳えている。
- (63) F, 181-3.
- (64) 同作家の(6)參照。前者はズ・カール戰に参加したタグリブ族。後者が正しいと思われる。T, 1/1030, 1037.
- (65) ジャジール・キリキア・キプロス征服に従事したアンサール。四五／六六五年沒。
- (66) T, 1/2482, 1/2507-9, T, 1/2509-11.
- (67) 原文ではハラージヤ。ジズヤという説もあるが税一般と見なすのが妥當と思われる。
- (68) この他 Qudāma, 179-180 を參照。
- (69) 注(25)參照。
- (70) タグリブ族に關しては Dāwūd b. Kurḏās al-Taghlibī の信頼度が高いと考えられるだけでなく、B(1)のイトイスナード最初の al-Saffāh al-Shaybānī に疑問あり。Qudāma 20 F(1)と同様の記述があるが F からの引用と思われる。
- (71) 他の記述を併せても、この際のウシュルが交易税・財産税・土地税の何れを意味しているのか曖昧である。
- (72) B, 5/328-331, I, 11/59.
- (73) AZ, 268-9, K, 6/113.
- (74) 以下 M の卷末リスト參照。前イスラーム時代ではネストリウス派のカトリコス Gregorius (605-8) 年時代にアーナに遊牧民のタグリブ族の單性論派の主教座があった事が記録されている。Mari b. Sulaymān, *Akhbār Faṭariḳa Kurṣi al-Mashriq*, Roma, 1889, 61.
- (75) Nejrāyē (カーファ方面に移住したナジャラン住民と考えられる)の主教は獨立している場合と Ma'dāyē の主教座と合同している場合がある。この後で Ma'dāyē との合同に復しているので、この事例は一時的な合同であらう。
- (76) Honigmann はキースル・ジャシール (Gāzira) の併記

から後者を Jazira ibn 'Umar の町と見なし、モースルとハ
ーブル流域のタグリブ族居住地とに二つの主教座があった
としているが、この町は二五〇／八六五年に建設されたので
その可能性はない。また八三四年以降に四人の主教が任命さ
れた可能性も否定できなう。F. Honigmann, *Le couvent
de Barsauma et le patriarcat Jacobite d'Antioche et de*

Syrie, CSCO sub. 7, Louvain, 1954, pp. 148–9 参照。

(77) M, 2/475, 4/448.

(78) 注(8)参照。

(79) M, 2/480-1, 4/451, BH, 1/104, 2/112.

(80) M, 2/481, 4/451, BH, 1/106, 2/115.

by the power of Aceh, which at that time placed major Sumatran ports, except that of south Sumatra, under its firm control. However, Aceh itself was dependent on the hinterlands from which commercial products and foodstuffs were supplied to coastal entrepôts. Some of the itinerant merchants involved in this supply network chose to settle in inner agricultural regions.

In order to legitimate their immigration to these inner regions, these people attempted to construct an ethnic identity by claiming that both they themselves and the local indigenous peoples were descended from a common ancestor who had originally lived in Sumatra, and whose descendants had subsequently spread throughout Sumatra. The Gayo, Batak and Minangkabau ethnic identities were reformed around their respective sacred places where, according to legend, their ancestors had lived.

Although these Sumatran peoples are often described as Proto-Malays or Deutero-Malays who emigrated to Sumatra very early (ca. 2000 B. C.), it is highly probable that the ethnic identities of Gayo, Batak and Minangkabau were reshaped in the sixteenth and seventeenth centuries. Previous studies of immigrants in Southeast Asia have tended to focus mainly on their role in the introduction of foreign culture to a native Sumatran world. It is necessary in addition, however, to examine the other important role of these immigrants in the creation of the “indigenous” world.

CHRISTIAN ARABS IN THE EARLY ISLAMIC PERIOD: THE CASE OF THE BANŪ TAGHLIB

OTA Keiko

My intent in this article is to study the history of non-Muslims living under Muslim rule, and in particular to analyze that which can be extrapolated from the history of the Banū Taghlib. The Banū Taghlib were one of the most influential tribes of the Rabīʿa coalition. Originally, they controlled an area in the northeast of the Arabian Peninsula,

especially in Yamāma. After fierce battles with the Bakrites (Banū Shaybān), they emigrated toward Iraq, extending into territory as far as the Euphrates. They then established themselves in Jazīra, held predominance over the tribes in this region, and accepted Monophysite Christianity. The Banū Taghlib were well-known to have remained Christian for several centuries after the Muslim conquest of Jazīra, and they were considered to be representative of Christian Arabs living under Muslim rule.

The first part of this article reconstructs the history of the Taghlibites from the pre-Islamic period to the heyday of the Abbāsīd dynasty. In this section I prove that the situation and sphere of the Taghlibites under Muslim regimes were in essence decided by relations among the Arabs and in the course of tribal conflicts. The Taghlibites were by degrees obliged to limit their sphere of control to include only Diyār Rabī'a, especially near Mawsil, however, this limitation is to be seen in continuity with pre-Islamic tribal conflicts waged to secure better pasturage and residence. The difference lay only in the fact that the enemy comprised Muslim Arabs who had inherited privilege and legitimacy in the Islamic government.

The second part of this article examines the substantial situation of the Taghlibites under Muslim rule, in which they were known to be imposed a doubled *ṣadaqa*. In this section, I utilize historical details gleaned from Taghlibite's contracts with the Muslim government, the conditions of their church, and the record of religious oppression they suffered, in order to analyze the actual conditions of non-Muslim communities and their Islamization in Islamic history.